

令和 8 年度 泉大津市立図書館協議会

■第 2 回会議の議事概要

日 時：令和 8 年 8 月 9 日（日）午後 6 時 00 分～午後 7 時 45 分

場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース（一部リモート参加）

出 席：嶋田議長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、高島委員、谷合委員

（欠席：高橋委員）

事務局：河瀬(図書館長)

公開の有無：公開

議 事

- (1) 「キミと、よみドキッ！Ver.2」案について

議事（1） 「キミと、よみドキッ！Ver.2」案について

【議事概要】

事務局より「キミと、よみドキッ！Ver.2」の概要版（漫画）および詳細版（QR コードリンク先）のドラフトについて説明。前回協議会でのご意見を踏まえ、基本的な考え方と目指す姿は変えず、変更箇所を赤字で示した。主な変更点は以下のとおり。

- ① 基本的な考え方の文言に「周知が必要なもののみを記載する」を追記（アンケートで図書館サービスが知られていないことが判明したため）
- ② 計画期間：生涯学習推進計画の二次計画に合わせ引き続き 3 年間（委員意見を踏まえ議論）
- ③ 漫画の対象を高学年～中学生想定に変更、キャラクターを成長させた絵柄に変更
- ④ 環境整備担当一覧の各項目に主語（例：市立図書館は）を明記

【委員意見・質疑（漫画・概要版）】

嶋田議長：漫画の 2 コマ目で「この本どう？」と語りかけ、次のコマでアンケート結果が提示される流れが繋がりにくい。「本が分厚くて読めない」という反応を受けてから、図書館ではいろんな使い方があるということを示すワンクッションがあるとス

トリーとして繋がるのではないか。また「OPAC」という言葉は業界用語で馴染みのない方もいると思う。「すべてのこどもの読書を支援」という表現も、学校図書館関係者から「支援より連携の方が一体感が出る」という声があるので、連携・共働という言葉への変更を検討してほしい。

谷合委員：「本が分厚い」への応答コマがないという点は同様の感想を持った。大人になると端から端まで読む必要のない本もある。必要なところだけ読むという読み方、参考図書の使い方を司書が教えられるという流れのワンクッションがあるといい。「学校支援サービス」という表現は図書館法でも「協力」と表記されており、支援より連携・共働の方が適切かもしれない。「データベース」という言葉も中学生に説明なしで伝わるか少し気になった。

澤谷委員：中学生ぐらいを対象にしているように読んだ。レファレンス編という位置づけでその点をもう少しはっきりさせると明確になると思う。こどもが自分で学んで気づいていくというストーリーの流れが見えてきているのはいい。整理すればいいものができると思う。

阿児委員：中学生・高校生ぐらいが対象だと思った。最後のコマの締めめのセリフがまだ入っていないことが気になる。バージョン 1 ではこどもたちの成長や広がりを示す言葉で終わっていた。今回は中高生向けにターゲットが上がっているので、「調べ方が身についてきた」「視野が広がった」というような締め方になるのではないか。最終コマのシチュエーションと入り口・出口の設計について事務局の想定を聞かせてほしい。

岡本委員：全般的な書きぶりは悪くない。主語が比較的こどもたち当事者側になっているのは大きい。学校支援サービスの箇所でもこども園にも触れているのは重要で、「園との連携サービス」ということも訴えてもいいのではないか。また泉大津市に「協働と参画に関する条例」があるので、「協働」という言い方が行政文脈としても妥当ではないかと考える。アンケートの説明コマについても、ワークショップや聞き取りなども行っているので「対話」という表現でもよいのではないか。

事務局：バージョン 1 の絵柄が幼すぎたという反省から、今回はそのキャラクターが高学年・中学生になったという設定で描いている。アンケートや聞き取りの中で、高学年・中学生は図書館を「勉強する場所・居場所」として捉えていることが明らかに

なった。先週、小中学校の先生を対象に探究学習の研修を行い、AI を絡めた問いの立て方や調べ方についてお話しいただいた。OPAC・レファレンス・データベースなどのツールを詰め込んでいるが、「自分で調べられるよ」ということを一番伝えたい。

谷合委員：AI 探索という表記が今回初めて出てきた。レファレンスでも AI で調べた結果を持ち込む利用者が増えており、AI をどう展開するかは難しい。レポートという言葉が出てくる時点で中学生・高校生向けだとわかった。

嶋田議長：AI 探索の意図はわかった。ただ、AI だけでなく司書がいることもどこかに示されるとよい。

谷合委員：レファレンスのコマがまさに「司書がいますよ」というメッセージになっているのではないか。

岡本委員：3 ページ目の選択肢にデータベース・辞典・本が並んでいるところに「司書」も入れてよいのではないか。また、ツールの名前（OPAC やデータベース）ではなく「何のためにこれを使うか」という目的を中心にした方がストーリーとして入りやすい。

澤谷委員：手段ではなく目的を書いた方がよい。また司書の姿が全体的にバージョン 1 より少なくなっているように感じる。いつでもサポートできる体制で待っているということが見えるとよい。セリフがなくても、心配そうに覗き込んでいるようなカットでちらっと出てくるだけでも印象が変わると思う。

谷合委員：前回版と比べると司書の姿が半分以下になっている。年齢層が上がって自分たちでできるからということかもしれないが、積極的に声をかけていくという姿勢も見せてほしい。

嶋田議長：絵本のように、ストーリーと関係ないところでもちらっとずっと存在しているという演出も有効ではないか。

谷合委員：読書会参加というセリフが今回入っているのがよかった。本を読んで帰るだけでなく、何か集まりに一步踏み出す感が出ている。最後のセリフに活かさないか。

事務局：ブックコミュニケーション（通称ブックコミ）を隔月で開催しているが、まれに中学生が参加してくれることがある。その体験を踏まえて「読書会」と表記した。

岡本委員：知のサイクルの説明が「疑問に感じたことを調べ、まとめて発表する」だけになっているのが気になる。知のサイクルで大事なのは自分自身が知的な成果を生産・再生産する側に回ること、どんな小さなことでもサムシングニューを自分の力で付け加えていくということ。そこをしっかりと入れた方が良い。

高島委員：「キミと、よみドキッ！」全体を貫くベースの言葉、「わからないことを調べ、知ること・読むことを喜びに感じ、伝えることができる」というところを、話し言葉で最後のセリフに活かしてもよいのではないか。「知ることって楽しいね」といったストレートな表現でいいと思う。

阿児委員：最初はレポートのネタ探しで来た子が、調べる中で新しい発見があって、学ぶ楽しさに気づいていく。その変化が最後のコマで見えるといい。「切り貼りするためのネタ本を探しに来た」から「気づきや発見があって視野が広がった」という変化を表せるとよい。「気づき」という言葉を一つの案として提案したい。また好奇心は外から育てるというより、もともとあったものに気づくという方がニュアンスとして近いのではないか。

嶋田議長：「なんやろうって思うことで、知りたいというスタートになる」「へえ、そういうことなんだという気づきの楽しさ」に結びつくようなセリフが理想。「知的好奇心が育っていく」という表現は大人の期待感が少し出すぎているかもしれない。今日のセリフ案のブレインストーミングはここまでとして、漫画の完成版についてはメールベースで確認することとしたい。

事務局：最後のセリフについては、コミュニケーションをとっている中学生がいるので、本当は今日ここに来てもらってセリフと一緒に考えたかった。できれば大人が考えた言葉をこどもたちに示して、自分たちの言葉に変えてもらうというやり取りができるチャンスがあればいい。夏休み明けに学校司書を通じてこどもたちに聞いてみることを検討したい。なお OPAC やレファレンス・データベースについては、おすすめの本を教えてほしいということこどもたちの声から AI 探索サービスをあえて漫画に入れた。ただし手段ではなく目的を前面に出す形で整理したい。

議事（１）続き 「キミと、よみドキっ！ Ver.2」詳細版（QR コードリンク先）について

事務局：詳細版も基本的な考え方と策定までの動きは変えていない。今回の変更点は、オンラインアンケートの結果の概要を追記したこと、環境整備担当一覧の書き方を各課が主語の形から「市立図書館は・学校図書館は」と主語を明確にした形に全面改訂したことの２点。中身の具体的な取り組みについては変更していない。

阿児委員：策定までの動きのページで、バージョン 1 から始まっているということへのリンクや参照があった方がいい。バージョン 2 だけ読んだ人がいきなり出てきたと感じないよう、バージョン 1 への経緯が辿れるようにしてほしい。

谷合委員：泉大津市のデジタルアーカイブ（ORIAM digital history）をどこかに入れてほしい。「デジタル資料」という表記だけだと何を指しているかわかりにくい。こどもたちが見て知的好奇心が刺激されるような内容なので、積極的に活用を促してほしい。

高島委員：アンケートをせっかく取ったので、どう活かしていくかが気になった。こどもの声を取り入れることは大事だが、静かに過ごしたいという意見とわいわいできる場所が欲しいという意見が相反する場合、この計画の根底にある考え方に基づいてどのように判断するのか聞きたい。

事務局：相反する意見があることは承知している。現在、桃山学院大学の水沼先生に詳細な分析を依頼している。シープラに来たことがない子が「静かにしてほしい」と書いているのか、よく来ている子が「賑やかでいい」と書いているのかといった相関を調べることで声のコンテクストが見えてくる。今夏は会議室を小中学生が積極的に使ってくれていて、静かに過ごしたいこどもは、自分たちで居場所を見つけてくれていると感じている。

澤谷委員：こどもが読みやすい多様な資料の収集・提供、こどもが読むことに触れられる場所の整備という項目があるが、資料や場所を提供するだけで終わっているように見える。提供した上で活用の支援もしますよということが少し見えるといい。特に

デジタルアーカイブは使い方のサポートが重要なので、収集・提供するだけでなくその後のお手伝いも行いうというニュアンスが入ると良い。

事務局：ご指摘のとおり。例えばセミナー＋調べる＋まとめるという形でアウトプットまで司書がサポートするという記載を入れることで、フォローまでするという姿勢を示せると思う。

岡本委員：詳細版にも読むことの多様性についての説明が入った方が良い。概要版（漫画）では読むことは広いというメッセージがあるが、詳細版を単独で読んだ場合に「読む」が従来の狭い意味で捉えられてしまう。各ページに「読む」という言葉が出てくるので、冒頭に「この計画における読むことの多様性」についての前提をさらっと添えると良い。またこどもが読みやすい多様な資料の項目に漫画を明示してほしい。概要版が漫画という表現手段で作られているのに、計画本文に漫画という言葉がないのは整合性がない。

嶋田議長：丸 9 に学校司書の配置に関する記述があり、「こどもの読書活動を指導できる司書を配置します」「授業への助言ができる司書を配置します」という書き分けがあるが、学校司書と市立図書館の役割分担の現状が反映されているのか確認したい。

事務局：前回から変えていない箇所だが、実際には学校図書館支援サービスの中で授業サポートがかなり広がっており、市立図書館の司書が学校に出向いてブックトーク・調べる学習の指導なども行っている。学校司書が橋渡しをさせていただいている形なので、そういう人材をもっと育成したいという意図で記載した。実態をより正確に反映する書き方を検討したい。

嶋田議長：⑨の 6 つ目に「学校図書館長である学校長はこどもの読書活動に責任を持つ」と明記されている。学校図書館の責任者が校長であることは法的・制度的に整理すると明確であり、こういうことが計画に書かれていること自体は重要だと感じた。また市民に学校図書館や学校司書の存在をもっと知ってもらうような取り組みについてはいかがか。

事務局：学校司書の役割を正面から紹介するような取り組みはまだやっていない。探究学習の研修などは行っているが、学校図書館そのものを市民に紹介するという観点での企画はこれからの課題と認識している。

高島委員：保護者の方の役割や繋がりがこの計画に見えてこない。読書活動は家庭環境にも大きく影響するので、保護者向けに計画を知ってもらい、日常で少しでも活かせるような接点があるといい。

嶋田議長：年度ごとの目標のところ、学校司書配置数や文部科学省の学校図書館図書標準の達成率、全国学校図書館協議会の学校図書館メディア基準（蔵書の鮮度に関する基準）などを数値目標に盛り込む検討もしてほしい。今のタイミングの提案で恐縮だが、一応申し上げたい。

事務局：年度ごとの目標の「読むことに関わる大人の数」は、市立図書館の司書数・学校司書数・まちぐるみ図書館の数を合算したもの。計算方法もページに明記した方がよいと気づいた。

嶋田議長：合算よりも、専門職・ボランティア等を分けて内訳で示した方が、それぞれの役割が伝わりやすいのではないか。

澤谷委員：数値目標が右肩上がりになっているのが少し気になる。バリアフリー資料点数など 3 年間で大幅に増やすのはなかなか難しいのではないか。前の計画で一定の成果が出ているものについては同じ水準を維持するという目標でも良いと思う。物価上昇などの現状も加味して数字の設定を慎重に考えてほしい。また人の問題については増員が社会的に難しい現状では現状維持するだけでも十分目標になり得る。読むことに関わる大人の人数よりも、大人がこどもたちにどれだけの時間関わったかという指標の方がこどもたちへのダイレクトな影響を示せるかもしれない。

岡本委員：評価のところで量的評価だけでなく質的評価の要素を入れてほしい。こどもたちが見るものだからこそ、すべてが量的評価なんだという認識を与えることになりかねない。また評価に際して当事者であるこどもたちの声を入れることが重要。行政評価的な部分はもちろん必要だが、受益者であるこどもたちがどう評価しているかが欠かせない。こどもたちが参画できるという可能性を示さないと絵に描いた餅に見えてしまうことを懸念する。

事務局：質的評価については図書館評価でここ最近取り組んでいるテーマであり、こどもたちに書いてもらうストーリーや聞き取りという形での質的評価を盛り込む方向

で検討したい。

阿児委員：参考資料（外部リンク）の見取り図について、法律・計画の名称の体系図よりも、目的の関係性が見える図の方がわかりやすい。具体的な法律名や計画名を網羅するのではなく、大きな目標から個別の計画がどのような目的で作られているかという関係性が見えると良い。こどもの読書活動推進計画がどういう位置づけのものなのかを示す素材として、国の法律・泉大津市の施策両方が含まれてくるのではないかな。

嶋田議長：政策体系の図というよりも、目的ベースでの関係性を示す図というイメージが参考になった。今日は時間が足りないので引き続き事務局と相談しながら検討してほしい。本日の議論をもとに事務局で成案を整理し、メールで各委員に確認いただいた上で最終調整をお願いしたい。

終了 （閉会予定時刻に終了）